

コーパスから見えるエストニア語不定詞構文の文法の変化

松 村 一 登

東京大学

【要旨】 現代標準エストニア語の動詞 keelama「禁じる」は、4つの不定詞構文と共起する：[接格／分格] + [MAST形／DA不定詞] ‘mees keelab [sõbral / sõpra] [tulemast / tulla]’ 「男は友人に来るなど言った」。1990年代と1920年前後のテキストを比較すると、1920年当時、動詞MAST形が接格名詞句と共起する構文は使われず、分格名詞句と共起する構文だけが使われていること、DA不定詞は、1920年頃は分格名詞句との共起が圧倒的に多いが、1990年代には接格名詞句との共起の方が圧倒的に多いことが明らかになる。これは、20世紀のエストニア語で、分格型に代わり接格型不定詞構文が多用される傾向が徐々に強まってきた結果として説明できる。また、接格型MAST形構文が1930年代以降のテキストにのみ現れることは、このような言語変化の捉え方と整合する*。

キーワード：エストニア語、コーパス、文法の変化、不定詞構文、接格

1. はじめに

共通の言語により情報をやりとりし、交流し合っている人々の集団を言語コミュニティ (language community)¹ と呼び、言語コミュニティにおいて実際に産出された発話やテキスト、すなわち言語使用が記録されたものを言語資料と呼ぶことにする。

言語資料は、言語コミュニティにおける言語使用の記録であるから、成立年代の異なる複数の言語資料の間に、偶然とは考えにくい差異が認められる場合、その差分は言語変化を反映したものであると考えられる。たとえば、ある語の使用例が、特定の年代以前のコーパスから見つからない場合、その語が用例が現れ始めた頃からその少し前から使われ始めたと推測する有力な根拠になる。また、並行して使われる形態論的変種 X と Y があるとき、もし、X と Y の相対的な使用頻度の年代によ

* 本稿は、2009年11月28日の日本言語学会第139回大会において行った口頭発表を発展させたものである。個別に名前は記すことができないが、同学会における口頭発表の予稿集原稿、あるいは、口頭発表に対して、コメントをいただいた方々にお礼を申し上げる。本稿の執筆の段階で詳細で貴重な意見をいただいた野島本泰氏と、投稿原稿に関して、細部にわたり、詳細かつ厳しいコメントをいただいた『言語研究』の査読者各位に感謝を申し上げる。

¹ Romaine (1994: 22) の speech community と language community の区別は、ロメイン (1997: 2) では、それぞれ「言語連合体」「言語共同体」と訳されているが、文献によっては、speech community を「言語共同体」と訳していることがあり紛らわしい。本稿では、Romaine (1994) による2つの概念の区別を考慮した上で、「言語コミュニティ」というあいまいな用語を用いる。

る変動に何らかの規則性が観察されるなら、その特定の語、ないしはその語が属する語のグループで起こった形態論的な変化が言語資料に反映されていると考えることができる。同様の考え方は、文の構造のレベルでも成り立つと考えられる²。

言語変化は、個々の話者の個人語のレベルではなく、話者の集まりとしての言語コミュニティにおける言語使用の総体のレベルで現れる現象としてとらえるべきものである (Romaine 1982: 17)。ある言語現象のコーパスにおける出現頻度の時代による推移は、言語変化の進行の反映ととらえることができるから、成立年代の異なる言語資料を比較することによって、言語変化が広がっていく様子が動的に捉えられるはずである。

2. エストニア語のコーパス

2.1. 本研究における基本的なコーパス

本研究で考察の基礎になるのは、エストニア語均衡コーパス (Tasakaalus korpus, 1500 万語; 以下「均衡コーパス」) とエストニア憲法制定会議議事録 (Asutawa Kogu protokollid, 193 万語; 以下「議事録コーパス」) と呼ばれる 2 つのコーパスである。

均衡コーパスは、1990 年代後半のエストニア語標準語のテキスト、新聞記事 500 万語、文学作品 500 万語、学術テキスト 500 万語から構成される³。

議事録コーパスは、1919 ~ 1920 に開かれたエストニア憲法制定会議の議事録の電子版で、1920 年前後のエストニア語標準語の姿を反映する言語資料と考えられる⁴。

² 過去 100 年ほどの間に起こった英語の不定詞補文と動名詞補文の用法の変化がコーパスから明らかになることを Rudanko (2010) が示している。コーパスを用いた言語の変化の研究一般に関しては、Rissanen (2008), Curzan (2009), Mair (2009) を参照。コーパスから得られたデータのコンピュータ処理と統計的解析に関しては、Gries (2008) と Oakes (2009) を参照。なお、本稿で用いるのはカイ二乗検定のみである。

³ 本研究で利用するコーパスは、すべて、エストニアのタルト大学コンピュータ言語学研究グループ (Tartu Ülikooli Arvutilingvistika Uurimisrühm) のホームページで公開されている (<http://www.cl.ut.ee/korpused/>; 2010 年 1 月末現在)。用例の出典は、コーパスの原ファイル名の略号 (i137) と、そのファイルにおける文番号 (0291) [i137_0291] のように添える。ファイル名が h/i/t で始まるのは均衡コーパス (順に新聞、文学、学術)、189/191/193 で始まるのは、標準語コーパス (順に 1890 年代、1910 年代、1930 年代) の用例である。[...] は、原文の一部を省略した箇所を示す。いずれのコーパスも、文のレベルまでのマークアップが行われているだけで、品詞形態情報の付加が行われていない形で公開されている。均衡コーパス、新聞コーパス、国会コーパスについては、タルト大学で開発された品詞形態解析プログラム (etmrf) による語のレベルの解析を行い、その出力結果を、曖昧性の除去 (disambiguation) を行わないまま検索した。議事録コーパスと標準語コーパスについては、現代エストニア語のテキストではないため、品詞形態解析プログラムによる信頼度の高い解析結果が期待できないので、プレーンテキストのまま利用した。品詞形態解析プログラム (etmrf) の Windows 版を提供してくれたタルト大学内の言語処理ソフト会社 FILOSOFT (<http://www.filosoft.ee/>) にお礼を申し上げる。

⁴ 議事録コーパスは、日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (A) #18202010, 「ロシアおよびその周辺の少数言語のコーパスの構築と記述的・歴史的研究」, 研究代表者・松村

2.2. 本研究における補助的なコーパス

均衡コーパスと議事録コーパスに含まれない時期の言語資料として、次のコーパスを利用する。この5つのコーパスは「エストニア語標準語コーパス 1890–1990」の部分コーパスで、本稿では「標準語コーパス」と総称する。いずれも規模が小さく、得られる用例数も少数に限られる。

	総語数	新聞記事	文学テキスト
1890年代	34.8万語	19.3万語	15.5万語
1900年代	23.6万語	17.1万語	6.5万語
1910年代	43.0万語	18.3万語	24.7万語
1930年代	36.9万語	11.7万語	25.2万語
1950年代	29.8万語	24.3万語	5.5万語

さらに、均衡コーパスから不定詞構文と共起する用例が見つからない一部の動詞について、不定詞構文と本当に共起しないのかどうかの確認を行う目的で、タルト大学のコーパス群に属する次の2つのコーパスを適宜利用する。それぞれ Segakorpus: Postimees, Segakorpus: Riigikogu として公開されている言語資料である。

新聞コーパス：日刊紙 Postimees のオンライン版 (1996～2000；3200万語)。

国会コーパス：エストニア国会 (Riigikogu) の議事録 (1995～2001；1250万語)

3. エストニア語の不定詞構文

本稿で「エストニア語の不定詞構文」と呼ぶ構文群は、他動詞、接格 (alalütlev/ adessive；略号 ADE)⁵、分格 (osastav/partitive；略号 PAR)、MAST 形 (*mast-vorm/ mast-form*；略号 MAST)、DA 不定詞 (*da-tegevusnimi/da-infinitive*；略号 DA) というキーワードで特徴付けられる。

一登) による研究において作成され、タルト大学のサイトで「エストニア語標準語コーパス 1890–1990」(Eesti Kirjakeele Korpus 1890–1990) の部分コーパスの1つ「1920年代コーパス」として公開されている。

⁵ 名詞の格変化、動詞の不定詞形など、エストニア語の形態論については、松村 (1998) を参照。本稿で例文のグロスに用いる略語は以下の通りである。

ADE	接格 (adessive)	COND	条件法 (conditional)
DA	da 不定詞 (da-infinitiv)	DEM	指示詞 (demonstrative)
GEN	属格 (genitive)	IMP	命令法 (imperative)
INDEF	不定人称 (indefinite person; umbisik)	INE	内格 (inessive)
MA	ma 不定詞形 (ma-tegevusnimi)	MAST	mast 形
NEG	否定小詞	NOM	主格 (nominative)
PAR	分格 (partitive)	PAST	過去 (past tense; imperfekt)
REL	関係代名詞 (relative pronoun)	pl	複数
1sg	1 人称単数	1pl	1 人称複数
2sg	2 人称単数	2pl	2 人称複数
3sg	3 人称単数	3pl	3 人称複数

3.1. 不定詞構文の範囲

本研究では、「～に～させない」という意味の「接格名詞句 + MAST 形」構文と共起することのできる他動詞に注目し、同構文と、このタイプの他動詞の作る文において同構文と交替することができると思われる3つの構文を合わせた4つの構文⁶の動詞ごとの使用頻度を考察の対象とする。

他動詞 +	接格名詞句 + 動詞 MAST 形	「接格 + MAST 形」構文
	分格名詞句 + 動詞 MAST 形	「分格 + MAST 形」構文
	接格名詞句 + DA 不定詞	「接格 + DA 不定詞」構文
	分格名詞句 + DA 不定詞	「分格 + DA 不定詞」構文

4つの不定詞構文の統語的な構造については、図1のような簡略化した依存構造図で表わされる情報があれば、本研究の議論にとって十分と考える。

現代エストニア語で4つの不定詞構文のいずれとも共起する他動詞 *keelama* 「禁じる」を用いて、それぞれの不定詞構文を例示すると (1a) - (1d) のようになる。4つの文は、本研究ではおおむね同義とみなすことができる。

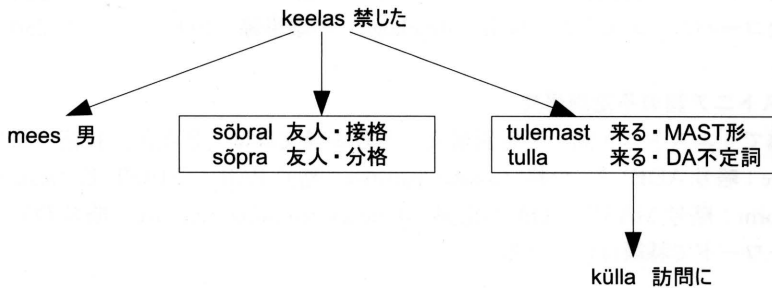


図1 他動詞 + 不定詞構文の統語構造

⁶ エストニア語の他動詞と共起する不定詞構文は、他にも、たとえば MA 不定詞が作るものがあるが、本論文では「不定詞構文」をここにあげた4つの構文に限定して用いる。MA 不定詞の構文を本論文の考察の対象から外す最大の理由は、分格型の構文だけで、接格型の構文がないためである。なお、「分格 + MAST 形」「分格 + DA 不定詞」における「分格」は、便宜的な呼び名である。不定詞構文に現れる「分格名詞句」は、直接目的語に起原をもち、動詞によっては、この位置で、分格目的語・属格目的語の交替に相当する現象が見られる。MAST 形構文と DA 不定詞構文の両方と共起する *keelama*, *takistama*, *segama* の場合はこの交代がなく分格名詞句のみ現れること、また、直接目的語の unmarked な格標示は分格であること、および、この位置に目的語が現れる動詞で、分格目的語をとれない動詞がないことから、本稿では、総称として「分格名詞句」を用いる。

- (1) a. Mees *keelas* *sõbral* külla *tulemast*.
 man.NOM forbid.PAST.3sg friend.ADE on_visit come.MAST
 「男は友人に、自分を訪ねてくるなと言った」 [Rätsep 1978: 200]
- b. Mees *keelas* *sõpra* külla *tulemast*.
 man.NOM forbid.PAST.3sg friend.PAR on_visit come.MAST
 [Rätsep 1978: 200]
- c. Mees *keelas* *sõbral* külla *tulla*.
 man.NOM forbid.PAST.3sg friend.ADE on_visit come.DA
 [Rätsep 1978: 196]
- d. Mees *keelas* *sõpra* külla *tulla*.
 man.NOM forbid.PAST.3sg friend.PAR on_visit come.DA
 [Rätsep 1978: 196]

なお、必要に応じて、名詞句の形態、ないし不定詞のタイプだけに注目した「接格型構文」「分格型構文」「MAST 形構文」「DA 不定詞構文」という二分法も用いる。

3.2. 不定詞構文の統語構造

標準文法 (Erelt et al. 1993: 64, 239, 241, 257) は、不定詞構文の分格名詞句 (*sõpra*) を他動詞の目的語 (objekt) とし、接格名詞句 (*sõbral*) を「所有者副詞句」(valdajamäärus) とする。不定詞構文の不定詞については、DA 不定詞 (*tulla*) を他動詞の不定詞形目的語 (infinitiivobjekt), MAST 形 (*tulemast*) を「被格支配副詞句」(*sõltuvusmäärus*; 他動詞の格支配下にある副詞句) としている。

所有者副詞句は、標準文法によれば「ある物と、所有、行為、関心、意識、責任などの関係に入る／にある／から離れる有生の存在」(elusolend, kelle valdusse või toime-, huvi-, taju-, vastus- vms piirkonda miski suundub, sinna kuulub või sealt lähtub; Erelt et al. 1993: 62) を表す副詞句である。不定詞構文の接格名詞句は、そのうちの「位置格の所有者副詞句」(lokatiivne valdajamäärus) に分類される。接格のこの用法は、松村 (1992), Matsumura (1994, 1997) が「接格の与格的用法」と呼んでいる用法である。

不定詞構文の接格名詞句は、Mihkla et al. (1974: 225, 232) では「目的語相当の副詞句」(objektadverbiaal) に分類する。副詞句とされるのは、直接目的語の標示に用いられる格形以外の形態で現れているためである (Mihkla et al. 1974: 222)。また、この接格の副詞句については、(a) 分格名詞句 (= 直接目的語) と交替することができる、(b) 主文の動詞に対しては目的語相当の副詞句として働き、DA 不定詞に対しては「動作主副詞句」(teggijamäärus) として働く、という二面性を持つと指摘している。

3.3. 不定詞構文をとる他動詞

「接格 + MAST 形」構文は、4つの不定詞構文のうち、もっともマイナーな構文である。エストニア語の標準文法は、MAST 形構文を2箇所 (Erelt et al. 1993: 64, 257) で話題にしているが、接格型の構文の文例は次の1例だけである。

- (2) Eeskirjad *takistasid* *meil* suuri tegusid
 rule.pl.NOM prevent.PAST.3pl 1pl.ADE big.pl.PAR deed.pl.PAR
tegemast.
 make.MAST

「規則が私たちが大がかりな仕事をするのを妨げた」 [Erelt et al. 1993: 64]

他動詞が「接格 + MAST 形」構文と共起する文例を多く挙げているのは、Rätsep (1978) と Kolsar (1984) で、動詞として、動詞 *takistama* 「妨げる」のほか *keelama* 「禁じる」と *segama* 「邪魔する」が文例付きで挙げられている。標準文法は、MAST 形構文をとることのできる動詞として、この3動詞を含む5つの動詞を挙げているが、例文 (2) 以外の文例はすべて「分格 + MAST 形」構文であるため、*takistama* 以外の動詞の「接格 + MAST 形」構文との共起について、明示的に述べていない。Tauli (1980: 332, 336; 1983: 342, 345) は、*takistama* と *keelama* が「接格 + MAST 形」構文と共起すると述べているが、文例を挙げていない。私の見た文書や研究文献における「接格 + MAST 形」構文に関する記述はこれだけである。

以上の文法書・研究文献が接格型と分格型の両方の MAST 形構文が現れるとしている他動詞は *takistama* と *keelama* だけだが、「分格 + MAST 形」構文と共起するとしている動詞はほかに8つある。これらの他動詞は「～させない」「～することをさまたげる」などと言い表すことができる否定的意味を動詞自身の意味の一部としてもち、そのことが MAST 形 (= MA 不定詞の出格形) の現れる動機となっていると考えられる点が共通している (cf. Kolsar 1984)。

行為・動作の遂行・継続を妨げることを表す他動詞

eksitama 「まどわす」 *segama* 「邪魔する」 *vabastama* 「解放す」
võõrutama 「遠ざける」

行為・動作の開始を妨げることを意味する他動詞

hoiatama 「警告する」 *hoidma* 「まもる」 *keelama* 「禁じる」
pidurdama 「抑制する」 *takistama* 「妨げる」 *tõkestama* 「妨げる」

文法書や研究文献はいずれも、他動詞と共起する MAST 形構文の中に、DA 不定詞構文と交替できるものがあることに触れているが、「接格 + DA 不定詞」構文と共起するとしている他動詞は次の8つである。

接格型構文、分格型構文の両方と共起するとされる他動詞

aitama 「手助けする」 *keelama* 「禁じる」 *käskima* 「命じる」

laskma 「～させる」 lubama 「許す」 paluma 「頼む」
 接格型構文と共起するとされる他動詞
 soovitama 「勧める」 võimaldama 「可能にする」

MAST 形構文をとる 10 の他動詞と DA 不定詞構文をとる 8 つの他動詞に関して、文法書等から得られた情報は表 1 の通りである。●は、いずれかの文献で、その動詞と共起すると明示的に述べられている不定詞構文（文例なしも含む）、グレーの部分は、その動詞と共起するという明示的な記述が文献にない構文である。

この 8 つの他動詞のうち、動詞の意味の一部として「～させない」という否定的意味を持つのは MAST 形構文と共起できる keelama だけで、他の 7 つは、いずれも DA 不定詞の表す行為・動作について、「～させる」「～してもらう」「～できるようにする」というような肯定的意味の文を作る動詞である。このタイプの動詞の場合、「～させない」という禁止は、不定詞の前に否定副詞 mitte を添えて表す。

表 1 現代エストニア語の文法書等で不定詞構文と共起するとされる他動詞

	MAST 形		DA 不定詞	
	接格	分格	接格	分格
takistama 妨げる	●	●		
keelama 禁じる	●	●	●	●
segama 邪魔する	●	●		
hoidma まもる		●		
hoiatama 警告する		●		
pidurdama 抑える		●		
eksitama 惑わす		●		
tõkestama 妨げる		●		
vabastama 自由にする		●		
võõrutama 遠ざける		●		
aitama 手助けする			●	●
käskima 命じる			●	●
laskma させる			●	●
lubama 許可する			●	●
paluma 頼む			●	●
soovitama 勧める			●	
võimaldama 可能にする			●	

- (3) Koolid pandi kinni ja *inimestel*
 school.pl.NOM put.INDEF.PAST closed and person.pl.ADE
kästi välja mitte *minna*. [h012_0204]
 order.INDEF.PAST out NEG go.DA
 「学校がみな閉鎖され、人々は外出することを禁じられた」

4. 現代エストニア語のコーパスにおける不定詞構文

この節では、現在のエストニア語の言語資料として均衡コーパスをとりあげ、不定詞構文の使用状況を見た（4.1. 節）あとで、文法書等の記述（表1）が、言語使用の実態を正確に反映したものになっているかどうかを検討する（4.2. 節）。

4.1. 均衡コーパスの不定詞構文

表2は、均衡コーパス（1990年代後半）について、4つの不定詞構文がどのような他動詞と共に用いられ（「不定詞構文の分布」と呼ぶ）、また、それぞれ、どのような頻度で用いられているかをまとめたものである。文法書等で、当該構文が現れるとされていない環境は、表1にならって、この表でもグレーで表示する。

表2 均衡コーパス（1990年代）に現れる不定詞構文

		MAST 形		DA 不定詞	
		接格	分格	接格	分格
takistama	妨げる	51	94	31	4
keelama	禁じる	24	15	151	4
segama	邪魔する	10	17	13	
hoidma	まもる		34		
hoiatama	警告する		5		
päästma	解放する		4		
säästma	なしですます		3		
kaitsma	まもる		2		
võõrutama	遠ざける		2		
peatama	とめる		1		
pidurdama	抑える		1		
sundima	しいる		1		
tirima	引っ張る		1		
varjama	かくす		1		
välistama	除く		1		
aitama*	手助けする			894	58
käskima*	命じる			280	31
laskma*	させる			2003	407
lubama*	許可する			919	27
paluma*	頼む			497	124
soovitama*	勧める			509	
võimaldama*	可能にする			584	7

表2のデータの集計は次のように行った。MAST形構文については、当該動詞とMAST形が現れているすべての文に個別に当たって、MAST形構文を作っているかどうか、また、その場合、接格型、分格型のどちらであるかを特定するという方法で、均衡コーパスにおけるそれぞれの不定詞構文の用例の実数を数えた。

DA不定詞構文の場合、MAST型構文の用例が見つかった他動詞については、

MAST 形構文と同様の作業、すなわち、当該の動詞と DA 不定詞が現れているすべての文に当たって、DA 不定詞構文を作っているか、また、その場合、接格型か分格型かをひとつひとつ特定しており、用例数は実数である。他方、DA 不定詞構文とのみ共起する他動詞（表で*で示した動詞）については、当該の動詞と DA 不定詞が現れる文のなかからランダムに抽出した 500 例について同様の作業を行い、得られた結果から、単純な比例計算でコーパス全体での使用頻度を推定した。

現代エストニア語で他動詞と共起する不定詞構文について、表 2 から次のことが明らかになる。

- A) 不定詞構文全体としてみたとき、MAST 形構文 (267 例) は、DA 不定詞構文 (6500 例) の 25 分の 1 程度の使用頻度である。
- B) DA 不定詞構文では、全体として (接格型 5850 : 分格型 650)、また、動詞ごとに見ても、すべて、接格型が分格型より優勢である。
- C) MAST 形構文は全体として、分格型 (182 例) が接格型 (85 例) より優勢である。
- D) MAST 形構文と共起する他動詞を個別にみると、takistama (接格型 51 : 分格型 94) は分格型が優勢 ($p=0.05, \chi^2=6.519 > 3.841$) で、全体と同じ傾向を示すが、keelama (接格型 24 : 分格型 15) と segama (接格型 10 : 分格型 17) では、接格型、分格型のどちらが優勢ともいえない (keelama: $p=0.05, \chi^2=1.052 < 3.841$; segama: $p=0.05, \chi^2=0.923 < 3.841$)。
- E) 両方の不定詞構文と共起する 3 動詞 (takistama, keelama, segama) に限った場合、全体としては、MAST 形構文 (214 例) と DA 不定詞構文 (203 例) の使用頻度には有意差がない。動詞ごとに見ると、2 つの不定詞構文の相対的な使用頻度はまちまちで、keelama (39:155) は DA 不定詞構文が優勢、takistama (148:35) は MAST 形構文が優勢、segama (27:13) はどちらかが優勢ともいえない ($p=0.05, \chi^2=2.527 < 3.841$)。

現代エストニア語の不定詞構文の使われ方は、次のように要約できる。

- 現代エストニア語の「接格 + MAST 形」構文は、事実上 3 つの動詞 (takistama, keelama, segama) に限定された構文である。DA 不定詞構文は、MAST 形構文ほどは共起する動詞が限定されていないし、使用頻度も一般に高い。
- MAST 形構文では、全体として、分格型が接格型より優勢である。ただし、keelama と segama においては、分格型、接格型が拮抗している可能性がある。
- DA 不定詞構文では、接格型が分格型に比べて際立って優勢である。

4.2. 文法書等の記述とコーパス・データの比較

エストニア語の文法書や研究文献には、第 3 節の表 1 のように、不定詞構文の分布、すなわち、それぞれの不定詞構文がどのような動詞と共に用いられるかが述べられているだけで、不定詞構文の使用頻度に関する情報はない。ここでは、文法書

等の記述（表1）と均衡コーパスから得られたデータ（表2）とを対照し、現代エストニア語における不定詞構文の分布を、実際の言語使用を反映した現実的な姿でとらえるとともに、使用頻度を考慮することによって、不定詞構文の使用パターンを動的に捉えることを試みる。

まず、文法書等の記述の修正されるべき点は、次の例が示すように *takistama* と *segama* が DA 不定詞構文と共起するにもかかわらず、それを明示的に述べていないことである。

- (4) a. Kohene tagasiside *takistab* *õppijatel* *õppida*
 immediate.NOM feedback.NOM prevent.3sg learner.pl.ADE learn.DA
 vigade avastamisest [...]
 error.pl.GEN discovery.ELA
 「即座のフィードバックは学習者が失敗に気付くことから学ぶのを妨げる」 [t080_0843]
- b. Sa *segad* *mul* *magada*, Kolja.
 2sg.NOM disturb.2sg 1sg.ADE sleep.DA Kolya
 「あなたが邪魔するので私は眠れないよ、コーリヤ」 [i005_1878]

なお、この2つの動詞が「接格 + DA 不定詞」構文を取っている文例は、エストニア語詳解辞典 (Eesti Keele Instituut 2009) にも1例ずつある⁷。

文法書等の記述（表1）と均衡コーパス中の用例（表2）とのあいだのずれは、MAST 形構文と共起する他動詞の顔ぶれにも見られる。2つの表を見比べつつ、4つの不定詞構文と共起する他動詞を3つのグループに分けてみる。

- A) MAST 形構文、DA 不定詞構文の両方と共起： *keelama*, *segama*, *takistama*
 B) MAST 形構文とのみ共起： *hoidma*, *hoiatama* など12動詞
 C) DA 不定詞構文とのみ共起： *aitama*, *käskima* など7動詞

このうち、AとCのグループについては、所属する他動詞の顔ぶれが、表1と表2でほぼ一定しているが、Bのグループについては、2つの表の間にかかなりの異同が見られる。

Bのグループの他動詞について、均衡コーパスのデータ（表2）で不定詞構文との共起頻度をみると、ごく一部の動詞（例 *hoidma* 「まもる」）を除き、その頻度が極端に低い動詞が多いという特徴が見られる。Bグループの他動詞は、MAST 形構文の定着の度合いによって、さらに2つに下位分類できそうである。

⁷ 動詞 *segama* 「邪魔する」が「分格 + DA 不定詞」構文と共起している文例は同辞典にはないが、補助的なコーパスの新聞コーパスに1例だけ見られる。

See ei *sega* *neid* *eetris* *ometi* *pidevalt* *jutukest* *vesta*, [...]
 DEM.NOM NEG disturb 3pl.PAR ether.INE still constantly tale.PAR tell.DA
 「それは彼らが [...] ずっと電波で話し続けることを妨げはしない」 [701c_14073]

文法書等に記載しているが、均衡コーパスでも用例が見つかる他動詞、すなわち、表1と表2の両方に現れている4つの動詞 hoidma (34例), hoiatama (5例), vöörutama (2例), pidurdama (1例) については、MAST形構文は十分定着して安定していると考えられる⁸。

他方、表1と表2のどちらか一方にのみ現れている動詞では、MAST形構文は十分に定着しておらず、不安定な状態にあると考えられる。文法書等に記載していないがコーパスに用例のある動詞 päästma (4例), säästma (3例), kaitsma (2例), peatama (1例), sundima (1例), tirima (1例), varjama (1例), välistama (1例) と、文法書等に記載しているがコーパスに用例がない動詞 (eksitama, tõkestama, vabastama) がここに属する⁹。MAST形構文との共起が定着していない動詞の場合、文法書等の著者の内省判断から漏れることは十分に考えられるし、その用法が実際の言語使用においてもまれと考えられるので、文法書等の扱いと均衡コーパスでの用例の出現との間に食い違いがあっても不思議はないと考えられる。

分格型のMAST形構文が十分に定着せず、不安定な状態にある他動詞があるということは、現代エストニア語で、この構文がわずかながらも生産性をもっている可能性を示唆する。均衡コーパスでこの構文と1回だけ共起している6つの他動詞(形態論的な生産性の指標とされる hapax legomena¹⁰「一回語」に相当する現象と考えられる)のうち5つが文法書等で言及されていないことにも、注目しておきたい。

5. 議事録コーパスにおける不定詞構文

次に、1920年頃のエストニア語の資料、議事録コーパスに目を向けてみる。表3は、議事録コーパスにおける4つの不定詞構文の分布と頻度を調べて集計したもの

⁸ 内省とコーパスの両方で確認されるのは、その用法が安定している証拠だと考えられる。どちらか一方の場合、すなわち、内省のみでコーパスに用例がない場合は、内省の一般性を疑う必要があり、逆に、コーパスに出てくるが頻度が低く、多くの話者の内省に現れない場合も、用法として安定していないと考えられる。

⁹ MAST形構文と共起する例が、均衡コーパスにはないが、補助的なコーパスからは見つかる動詞が4つある。この中で tõkestama に「接格+MAST形」構文の例がある点が注目される。4つの動詞のうち、エストニア語詳解辞典 (Eesti Keele Instituut 2009) にMAST形構文と共起する文例があるのは eksitama (分格型1例) だけである。なお、議事録コーパス、標準語コーパスに使用例がない keelustama と tõkestama は、比較的最近になって不定詞構文と共起し始めた動詞である可能性が高い。

	新聞コーパス		国会コーパス	
	接格	分格	接格	分格
eksitama 惑わせる				1
keelustama 禁止する				1
tõkestama 妨げる	2	2		
vabastama 自由にする		1		

¹⁰ 形態論・語形成論における接辞の生産性の指標として、一回語の数をそのタイプの語のすべてのトークン数で割った数値が用いられることに関しては、Baayen and Lieber (1991), Bauer (2001), Baayen (2009) などで論じられている。

である。この表でグレーで示している箇所は、現代エストニア語の文法書等で、当該構文が現れるとされていない環境に相当する。

このデータは、MAST 形構文、DA 不定詞構文ともに、議事録コーパスで当該動詞と MAST 形または DA 不定詞が共起しているすべての文に当たって、不定詞構文を作っているかどうか、また、その場合、接格型か分格型のどちらであるかをひとつひとつ特定しつつ集計した数字である。議事録コーパスは、小規模のため、不定詞構文の用例はそれほど多くなく、不定詞構文が現れる他動詞の顔ぶれにも均衡コーパスほどの多様性が見られないが、1920 年当時のエストニア語における一般的な傾向をみるには十分な情報を与えてくれると考える。

表3 議事録コーパス (1920 年頃) に現れる不定詞構文

		MAST 形		DA 不定詞	
		接格	分格	接格	分格
takistama	妨げる		26	1	8
keelama	禁じる		7	5	8
segama	邪魔する		1		
hoidma	まもる		2		
aitama	手助けする			7	13
käskima	命じる			3	9
laskma	させる			11	193
lubama	許可する			44	22
paluma	頼む			2	308
soovitama	勧める			1	
wõimaldama	可能にする			7	1

表3 から、1920 年頃のエストニア語の不定詞構文について以下のことがわかる。

- A) MAST 形構文の用例 (36 例) はすべて分格型である。すなわち、1990 年代のエストニア語で「接格 + MAST 形」構文が使われる 3 動詞 (takistama, keelama, segama) のいずれも、「接格 + MAST 形」構文と共起していない。
- B) DA 不定詞構文では、接格型と分格型の両方が見られるが、接格型 (81 例) に対して分格型 (561 例) の用例が圧倒的に多い。
- C) DA 不定詞構文の頻度を動詞ごとに見ると、分格型の方が頻度の高い動詞が多い。一方、接格型の頻度の方が高い 3 つの動詞 (lubama, soovitama, võimaldama) の中で、統計的な検定に意味を持たせられる用例数をもつ動詞 lubama の場合でも、接格型 (44 例) と分格型 (22 例) の頻度に違いがあると言い切ることはできない ($p=0.05, \chi^2=3.771 < 3.841$)。
- D) MAST 形構文と DA 不定詞構文の両方と共起する 2 つの動詞 (takistama, keelama) に限ってみると、MAST 形構文 (33 例) が DA 不定詞構文 (22 例) に対して優勢とは言えない ($p=0.05, \chi^2=1.111 < 3.841$)。

以上の要点だけまとめると、1920年頃のエストニア語における不定詞構文の使われ方は、次のように要約できる。

- MAST形構文では、分格型構文のみで、接格型構文は現れない。
- DA不定詞構文では、分格型が接格型に比べて一般に優勢である。

6. エストニア語の不定詞構文の歴史的变化に関する仮説

第4節と第5節でみたように、現代のエストニア語のテキスト（均衡コーパス）と1920頃のエストニア語のテキスト（議事録コーパス）を比べると、後者における不定詞構文の動詞ごとの分布は、ちょうど前者におけるその部分集合的パターンを示している。2つのコーパスのデータの間の違いは、次のように要約できる。

- 議事録コーパスに用例のない「接格+MAST」構文が、均衡コーパスでは比較的頻繁に用いられている。

また、不定詞構文の下位タイプの相対的な使用頻度に注目すると、2つのコーパスの間に次のような違いが観察される。

- DA不定詞構文は、議事録コーパスでは分格型が優勢(81:561)だが、均衡コーパスでは接格型が優勢(5850:650)で、関係がほぼ逆転している。

均衡コーパスと議事録コーパスの間に見られる、不定詞構文の分布と頻度に関する違いを統一的に説明するために、エストニア語の4つの不定詞構文、すなわち「接格/分格+MAST形/DA不定詞」構文をめぐって、次のような言語変化が20世紀に起こったとする仮説を立ててみる。

- I. 20世紀の初めと比べ、現在では、接格型の構文（接格+MAST形/DA不定詞）の使用頻度が分格型の構文（分格+MAST形/DA不定詞）に対して相対的に高まっている。
- II. DA不定詞では、接格と分格の交替は20世紀の初めからあり、当初、分格型構文が優勢だったと考えられるが、現在では分格型構文と接格型構文の勢力関係は逆転している。
- III. MAST形では、20世紀の初め頃は接格型構文は用いられず、分格型構文のみだったと考えられるが、現在では両方の構文型が拮抗している。
- IV. 「接格+MAST形」構文は、1920年代以降に生まれた比較的新しい構文と考えられる。

この文法の変化のイメージを視覚的に表すと、図2のようになるであろう。図2を文章で表現すれば「エストニア語では、20世紀初めから、分格型に代わって、接格型の不定詞構文が一般化し、もともと接格型が見られなかったMAST形構文でも1920年代以後、接格型構文が見られるようになり、現在に至っている」ということになる。なお、この変化が、すでに収束しているかどうかについては、決め

手となる証拠はなく、現在まだ進行中である可能性も捨てきれないとする。

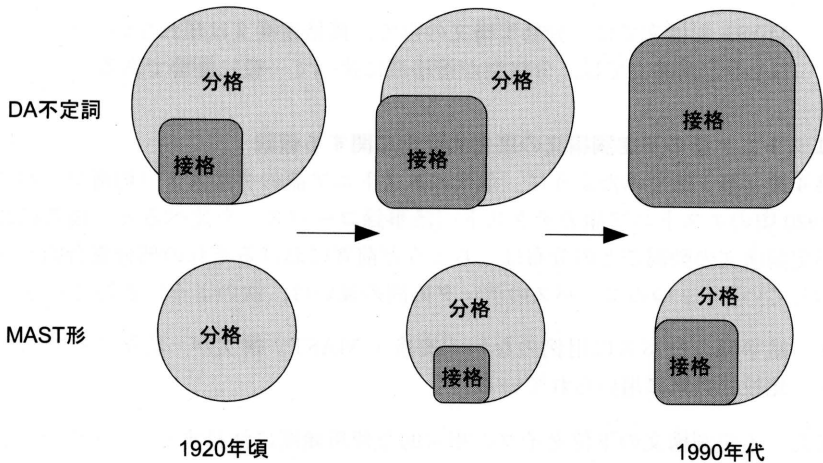


図2 「接格/分格+ MAST形/ DA不定詞」使用頻度の歴史的変遷 (イメージ)

7. 不定詞構文をめぐる言語変化に関する仮説の検証

現代エストニア語 (均衡コーパス) と 1920 年頃のエストニア語 (議事録コーパス) における不定詞構文の使われ方にはっきりとした違いがあることから、20 世紀のエストニア語で文法が変化したとする仮説を 6 節で提示したが、その妥当性を検証するのが本節の目的である。

一般に、仮説の妥当性の指標は、その仮説をたてる際に参照していなかった言語資料から得られるデータがどのようなものであるのかを、どの程度うまく予測できるかであると考えられる。すなわち、この論文のテーマに即して言えば、1920 年をはさんだ前後の数十年間の言語資料から得られる不定詞構文のデータが、仮説で主張されている文法の変化を反映したものになっていると解釈できる場合、別の言い方をすれば、この時期のコーパスから得られるデータと仮説の予測との間に高い整合性が見られるなら、仮説は高い妥当性をもつと考えられる。

7.1. 標準語コーパスにおける不定詞構文

7.1.1. MAST 形構文

標準語コーパスの部分コーパスは一般に小さいため、不定詞構文との共起が期待されても、用例が見つからない動詞がある。MAST 形構文と共起する用例が見つかるのは、表 4 の 3 つの動詞のみで、用例数も少ない。

表 4 からは「分格 + MAST 形」構文は 19 世紀末にはすでに使われていたことがわかる。これに対し、「接格 + MAST 形」構文は、1910 年代以前のコーパスには

用例がなく、1930年代（1例：例文（5））と1950年代（2例）のコーパスだけに見られる。

表4 標準語コーパスにおけるMAST形構文

	1890年代		1900年代		1910年代		1930年代		1950年代	
	接格	分格	接格	分格	接格	分格	接格	分格	接格	分格
takistama		1		1		6		5	2	3
keelama		9		1		8	1			1
hoidma		1		2		6		1		

- (5) [...] mis *keelaks* näiteks *minul* isiklikult
 what.NOM forbid.COND.3sg for_example 1sg.ADE personally
 seda *asutamast?*
 DEM.PAR found.MAST
 「たとえば私がそれ「新聞」を設立するとしたら、妨げるものはあるだろうか」
 [193i_16014]

以上をまとめるならば、1920年頃まで用いられたMAST形構文は分格型のみで、現代語で見られる接格型のMAST形構文が現れたのは1920年代以降とする仮説は、標準語コーパスから得られたデータと整合性をもつといえる。

7.1.2. DA不定詞構文

標準語コーパスにおけるDA不定詞構文の頻度と動詞ごとの分布の集計が表5である¹¹。この表では、接格型と分格型のどちらかが優勢と見なせる場合にグレーで色づけしてある。まず、(6)に見るように、接格型のDA不定詞構文は、すでに1890年代にから使われていることに注目したい。

- (6) [...] ja seal oma jalga ja peaad *tohtril* *läbikatsuda*
 and there own leg.PAR and head.PAR doctor.ADE examine.DA
 ja *raivitseda laske*.
 and treat.DA let.IMP.2pl
 「そして、そこで自分の足と頭を医者に診断し治療してもらいなさい」
 [189i_3214]

表5をもとに、それぞれの時期の接格型と分格型の構文の相対的な使用頻度をグラフで表したのが図3である。

¹¹ 動詞 takistama と hoidma には、分格型構文との共起の用例が1例ずつ (takistama: 1900年代; hoidma: 1890年代) あるが、その後の時期の用例がないため、考察の対象外とし、表5の集計の数値には含めなかった。なお、標準語コーパスには、動詞 segama がDA不定詞構文と共起する用例がまったくない。

表5 標準語コーパスにおける DA 不定詞構文

	1890年代		1900年代		1910年代		1930年代		1950年代	
	接格	分格	接格	分格	接格	分格	接格	分格	接格	分格
keelama	1	3		2	2	1	2	1	2	2
aitama	1	3	3	1	3	5	5	2	20	4
käskima	3	18	2	17	4	14	5	8	3	3
laskma	3	121	6	56	8	99	30	43	22	11
lubama	2	6	2	12	6	14	7	2	18	2
paluma		37		11		54		8	1	21
soovitama							5		12	
võimaldama							2		21	
計	10	188	13	99	23	187	56	64	99	43

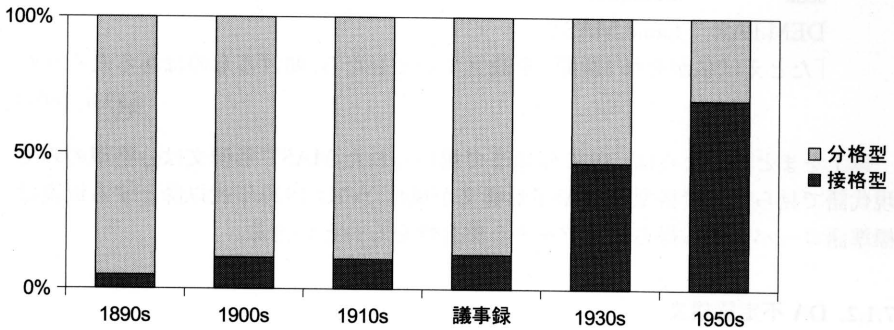


図3 接格型と分格型の DA 不定詞構文の相対頻度の推移

表5と図3から、DA不定詞構文は、全体としてみると、1910年代までは明らかに分格型が優勢であることが読み取れる。その後、1930年代に接格型が分格型とほぼ互角 ($p=0.05, \chi^2=1.167 < 3.841$) になり、さらに1950年代には分格型より優勢になっていることもわかる。なお、図3のグラフに参考として添えた議事録コーパスのデータは、分格型のDA不定詞が優勢であった時代の終わりのところに問題なく位置づけられ、この点でも、不定詞構文の歴史の変遷に関する仮説と標準語コーパスのデータとの整合性が確認できる。

表5と図3でDA不定詞構文の使われ方を動詞ごとにみると、全体の傾向と同じく、1910年代まではどの動詞においてもおおむね分格型構文が優勢であるが、1930年代には、接格型が分格型と同程度、ないし、やや優勢である動詞が目立つようになり、1950年代になると、大部分の動詞において接格型の優勢がはっきりする。

このような全体の傾向の中で、動詞 paluma「頼む」だけが、1950年代になるまで「接格+DA不定詞」構文と共起する用例が標準語コーパスに現れないという例外的な様相を見せている。1920年頃の言語資料である議事録コーパスには、この動詞が接格型のDA不定詞構文と共起する例が2例あるものの、分格型の308例に比べる

ときわめて少ない。参考までに、同じく議事録コーパスで分格型の DA 不定詞構文の用例が多い動詞 *laskma* 「させる」を見ると、議事録コーパスでの接格型 DA 不定詞構文の割合は 5% 程度である。現代語の言語資料である均衡コーパスでは、共起する DA 不定詞構文のうちの分格型の用例の割合は、動詞 *paluma* が 20.0%、動詞 *laksma* が 18.9% となっており、この 2 つの動詞は、分格型をとる比率において、第 3 位の動詞 *käskima* 「命じる」(10.0%) を大きく引き離している。この 2 つの動詞に関するデータは、DA 不定詞構文における分格型から接格型への移行が始まるのが、何らかの理由で、他の動詞の場合より遅れ、その後の分格型構文の衰退の進行も他の動詞と比べて緩やかであったと考えればうまく説明できそうである¹²。また、*soovitama* 「勧める」と *võimaldama* 「可能にする」は、1910 年代まで不定詞構文と共起する用例が見られず、議事録コーパスでも不定詞構文との共起はきわめて少ない。このうち、*võimaldama* は、動詞の用例そのものが 1910 年代になって初めて現れるところから、このころ使われ始めた新語である可能性がある。この 2 つの動詞の場合、DA 不定詞構文と共起し始めた時期が、ちょうど接格型構文が勢力を強め、分格型構文が退行を始めた時期と重なったため、最初から接格型構文とだけ共起する形で出発したと考えれば、データの説明がつくと考えられる。現代語（均衡コーパス）で「分格 + DA 不定詞」構文との共起の例が *soovitama* になく、*võimaldama* にもごくまれ（共起している不定詞構文の 98.9% が接格型）にしか見られないのは、おそらく、このような歴史的背景があるためと考えられる。

MAST 形構文か DA 不定詞構文かという構文のタイプの違いによって、また、同じ DA 不定詞構文でも、個々の動詞ごとに、変化が始まる時期や、変化の進む速さが異なっているのは、音韻や形態の変化が、同じ条件下にあると考えられるすべての語において、一斉に起こり、同じ位相で進行するわけではないことと原理的に同じ現象であると考えられる。すなわち、DA 不定詞構文全体として、1920 年代以降、接格型構文が勢力を拡大し、分格型構文は次第に衰退してきたとする仮説の予測と、標準語コーパスから得られたデータの間には、基本的な食い違いは見られないと結論して問題なさそうである。

7.2. 分格型構文の衰退の要因は推測できるだろうか

接格型の不定詞構文が次第に増え、分格型の不定詞構文が衰退する方向に文法が変化しているとする仮説の妥当性が確認できたので、この文法の変化が起こった要因を推定することができるかどうか考えてみたい。具体的には、分格型の不定詞構文で不定詞の位置に現れる他動詞が目的語を伴っている場合、分格型の不定詞構文では、分格名詞句が 2 つ現れることがあるが、それが好ましくないと考えられて、

¹² 不定詞構文をめぐるこの文法変化が、動詞ごとにまちまちのテンポで進行していることは、音韻変化において *diffusion* と呼ばれている現象（説明原理）を想起させるという指摘を Ilse Lehiste 教授からいただいた。

分格型の構文を敬遠して、接格型の構文が好まれる傾向が生まれたとする機能的説明が成り立つ可能性があるかどうか、検討してみる。

表6 MAST形構文における直接目的語の有無(均衡コーパス)

		接格型		分格型	
		目的語なし	目的語あり	目的語なし	目的語あり
takistama	妨げる	26	25	61	33
keelama	禁じる	12	12	11	4
segama	邪魔する	6	4	9	8
	計	44	41	81	45

表6は、MAST形構文が接格型と分格型の両方で現れる3つの他動詞 takistama, keelama, segama について、均衡コーパスにおける不定詞構文の用例を、不定詞の位置に現れている動詞が目的語を伴っているかどうか注目して調べたものである。この場合、目的語を伴わないケースには、動詞が自動詞である場合のほか、他動詞であっても目的語が明示されない場合が含まれる。

表6を見ると、不定詞に目的語がある場合に関しては、接格型(41例)と分格型(45例)のどちらが好まれているとも言えないことがわかる。これに対し、不定詞に目的語がない場合を見てみると、接格型(44例)より分格型(81例)の方がよく使われている($p=0.05, \chi^2=5.599 > 3.841$; しかし $p=0.01, \chi^2=5.599 < 6.635$)とかなり言えそうである。とくに、用例全体の3分の2を占める takistama の用例にだけ限定すると、目的語がない場合、接格型(26例)より分格型(61例)がよく使われていることがもう少し鮮明になる($p=0.01, \chi^2=7.337 > 6.635$)。

この結果から言えることは「分格名詞句の重複を避けるために起こった変化」とする機能的説明が成り立つ可能性がまったくないとは言えないが、根拠としてはきわめて弱いということになる。つまり、たとえこの要因が、現代エストニア語における分格型と接格型の選択に関与していたとしても、主要な要因であるとは考えにくく、決定的な要因はほかにあると考えた方がよさそうである¹³。

以上のような理由で、今回用いたコーパスのデータからは、残念ながら、接格型構文が使われるようになった要因の解明は無理と諦めるのが妥当と思われる。今後、エストニア語のコーパスは量的にも質的にも拡充されていくと考えられ、新たな研究の可能性も開けるだろうことが期待される。

8. まとめと展望

言語の変化は、「時期XにA>Bという変化が起こる」とする点的な視点ではなく、「時期Xに従来のAと並んで新たにBが用い始められ、AとBの併用の段階を経て、しだいにAが衰退し、やがて時期YになるとAが見られなくなりBだけにな

¹³ 最初の原稿において、表6のデータの説明と解釈に不備があった点を指摘された査読者の方にお礼を申し上げます。

る」という動的な視点でとらえるべきであることは、中期英語における大母音推移 (Smith 1993) や、近世前半の日本語における動詞の二段活用の一段化などによってよく知られている。同様の見方が、構文の変化についても成り立つことが、コーパスを利用した言語変化の研究によって明らかになりつつある (たとえば Rudanko 2010)。

言語資料は、言語コミュニティの言語使用の記録されたものであるから、コーパスにおける A と B の出現頻度は、その当時の言語コミュニティの言語使用における A と B の使用頻度を反映していると考えられる。したがって、成立年代が異なるコーパスにおいて、A と B の出現頻度に差違が見られるとすれば、それは、言語コミュニティにおける言語使用の変化を示唆していると考えられる。これが、コーパスに基づいた言語変化の研究の基本的な考え方である。

言語の変化に関する仮説の検証は、その仮説の基礎になった言語資料がカバーしていない時期の言語資料において、問題の言語事象がどのような姿で現れることが期待されるかをその仮説に従って予測し、はたして実際の言語資料から予測と整合するデータが得られるかどうかを確認するという手順に従って行なわれるものと考えて、この論文ではそれを実際に行ってみた。

本研究からわかることは、歴史的コーパスが理想的な形で整備されていない言語でも、文法変化を定量的に明らかにすることができる場合があるということである。その時点で利用可能なコーパスに基づいた研究を行うことは、今後どのような言語資料が利用可能になればより理想的な研究成果が得られるか明らかにすることにつながる。そして、その結果として言語資料の整備の方向が定まり、言語資料の整備がより一層進むにしたがって、研究のレベルや精度が次第に上がっていくという形で、歴史的コーパスに基づく言語変化の研究が進展していくことが期待できる。

参 照 文 献

- Baayen, Harald (2009) Corpus linguistics in morphology: Morphological productivity. In: Anke Lüdeling and Merja Kytö (eds.) (2009), 899–919.
- Baayen, Harald and Rochelle Lieber (1991) Productivity and English derivation: A corpus-based study. *Linguistics* 29: 801–843.
- Bauer, Laurie (2001) *Morphological productivity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Curzan, Anne (2009) Historical corpus linguistics and evidence of language change. In: Anke Lüdeling and Merja Kytö (eds.) (2009), 1091–1109.
- Eesti Keele Instituut (2009) *Eesti kirjakeele seletav sõnaraamat*. Tallinn: Eesti Keele Sihtasutus.
- Erelt, Mati, Reet Kasik, Helle Metslang, Henno Rajandi, Kristina Ross, Henn Saari, Kaja Tael and Silvi Vare (1993) *Eesti keele grammatika II. Süntaks. Lisa: Kiri*. Tallinn: Keele ja Kirjanduse Instituut.
- Gries, Stefan Th. (2008) *Statistik für Sprachwissenschaftler*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Kolsar, Aili (1984) *Sekundaarse ma-, mas-, mast- ja mata-konstruksiooni struktuur ja tähendus*. Unpublished diploma thesis, Tartu Ülikool.
- Lüdeling, Anke and Merja Kytö (eds.) (2008) *Corpus linguistics. An international handbook*. Volume 1. Berlin: Walter de Gruyter.
- Lüdeling, Anke and Merja Kytö (eds.) (2009) *Corpus linguistics. An international handbook*. Volume 2. Berlin: Walter de Gruyter.
- Mair, Christian (2009) Corpora and the study of recent change in language. In: Anke Lüdeling and

- Meja Kytö (eds.) (2009), 1109–1125.
- 松村一登 (1992) 「エストニア語の接格 (adessive) について」文化言語学編集委員会 (編) 『文化言語学』 993–1008. 東京: 三省堂.
- 松村一登 (1998) 「エストニア語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典セクション ヨーロッパの言語』 116–133. 東京: 三省堂.
- Matsumura, Kazuto (1994) Is the Estonian adessive really a local case? *Journal of Asian and African Studies* 46/47: 223–235.
- Matsumura, Kazuto (1997) The dative use of the adessive case in Estonian: A corpus-based study. In: Matsumura, Kazuto and Hayasi Tooru (eds.) *The Dative and related phenomena*, 31–79. Tokyo: Hituzi Shobo.
- Mihkla, Karl, Lehte Rannut, Elli Riikoja and Aino Admann (1974) *Eesti keele lauseõpetuse põhiõoned I: Libtlause*. Tallinn: Valgus.
- Oakes, Michael P. (2009) Corpus linguistics and language variation. In: Paul Baker (ed.) *Contemporary corpus linguistics*, 159–183. London: Continuum.
- Rätsep, Huno (1978) *Eesti keele libtlauseete tüübid*. Tallinn: Valgus.
- Rissanen, Matti (2008) Corpus linguistics and historical linguistics. In: Anke Lüdeling and Merja Kytö (eds.) (2008), 53–68.
- ロメイン, スーザン (1997) 『社会の中の言語』 東京: 三省堂.
- Romaine, Suzanne (1982) What is a speech community? In: Suzanne Romaine (ed.) *Socio-linguistic variation in speech communities*, 13–24. London: Edward Arnold.
- Romaine, Suzanne (1994) *Language in society: An introduction to sociolinguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Rudanko, Juhani (2010) Change and variation in complement selection: A case study from recent English, with evidence from large corpora. In: Stefan Th. Gries, Stefanie Wulff and Mark Davies (eds.) *Corpus-linguistic applications. Current studies, new directions*, 49–66. Amsterdam: Rodopi.
- Smith, Jeremy J. (1993) Dialectal variation in Middle English and the actuation of the Great Vowel Shift. *Neuphilologische Mitteilungen* XCIV: 259–277.
- Tauli, Valter (1980) *Eesti grammatika II: Lauseõpetus*. Uppsala: Uppsala universitet, Finsk-ugriska institutionen.
- Tauli, Valter (1983) *Standard Estonian grammar. Part II. Syntax*. Studia Uralica et Altaica Upsaliensia 14. Uppsala: Uppsala University.

執筆者連絡先:

〒 113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科

kmatsum@l.u-tokyo.ac.jp

[受領日 2010年4月28日

最終原稿受理日 2011年5月31日]

Abstract**Corpus Evidence for Syntactic Change in Estonian Infinitive Constructions**

KAZUTO MATSUMURA

University of Tokyo

In present-day Estonian, the verb *keelama* ‘to forbid’ occurs with four types of infinitive constructions: [adessive / partitive] + [MAST-form / DA-infinitive] (*mees keelab sõbral / sõpra tulemast / tulla* «man forbids friend from coming / to come» ‘the man forbids a friend from coming / to come’). On the basis of usage data drawn from two corpora, one consisting of present-day Estonian texts and the other of early 20th century texts, the author points out that (1) at the turn of the 1910s and 1920s, the infinitival MAST-form, which nowadays occurs with the adessive as well as the partitive, did not occur with the adessive at all, and was used exclusively with the partitive; and that (2) the DA-infinitive was used with the partitive considerably more frequently than with the adessive in the early years of the 20th century, but the picture is the other way round in the Estonian texts of the late 1990s, where the DA-infinitive occurs with the adessive almost 9 times more frequently than with the partitive. These two facts can be explained as a result of a syntactic change which the Estonian standard language underwent during the course of the 20th century: the adessive case (e.g. *sõbral*) gradually gained ground in the infinitive constructions at the expense of the partitive case (e.g. *sõpra*). The relatively late origin (1920s or later) of the infinitive construction with the adessive and the MAST-form (e.g. *keelab sõbral tulemast*) fits perfectly into this scenario.